

経済学・実存主義から公共哲学、統合学、共生科学へ
：我が知的遍歴ないし発展と普遍的課題

1 若き頃の知的遍歴

1.1 一橋大学時代 (1967.4~1972.3)

二つの問題意識

- ・ 貧困問題と福祉のための経済学 (経済研究)
マルクス主義の史的唯物論や宗教論には疑問だったので、ケインズ左派と厚生経済学をテーマとする塩野谷祐一ゼミを選択。しかし、没哲学的内容には失望した。ちなみに、塩野谷教授が哲学に転向したのは、私が一橋を去った後。卒論テーマ「厚生経済学から公共経済学へ」(内容は大変凡庸)
- ・ 実存主義へとキリスト教左派への関心
かけがえのない個の実存と生きる意味というテーマ。サルトル(無神論的実存主義)よりも、ヤスパースやフランスのキリスト教左派(ムーニェ、リクールなど)に興味。
- ・ 学生運動に関しては、ベトナム反戦運動には共鳴。ノンセクト・ラジカルの立場。何のための学問か」という問いの重要性は今日まで持続。1970年代初めに信濃町の真生会館(カトリック系)を拠点に同人誌などを作り活動。シュガレ神父などと読書会。解放の神学(モルトマン、メッツ、金芝河、イリイチなど)
- ・ しかし実存主義と社会科学のリンク(結節点)を見いだせず、それを同時に追求できる哲学に関心を抱き、将来の留学を見据えて外国人教員のいる上智大学院へ進学。

1.2 上智大学院時代 (1973.4~1977.2)

- ・ 1972 年は聴講生として哲学と神学の基礎勉強に励む。また、解放の神学に関心を寄せるスペイン人のアドルファ・ニコラス神父やホアン・マシア神父と読書会を開く。
- ・ 1973 年度に上智大学院哲学研究科に入学。チェコ人のアルムブルスター神父のゼミで、ヘーゲル『法の哲学』(1821)の現代的意義に開眼。倫理と制度論と人間論をリンクさせる視点を学んだほか、カントとシェリングの意義も習得。さらに、スターリニズム体制下東欧の人権弾圧の悲惨さとともに、神父がフランクフルトでアドルノのゼミに出ていた体験談とともに『啓蒙の弁証法』『否定的弁証法』の意義も学ぶ。
- ・ 他方ドイツ人の中世思想の大家リーゼンフーバー神父ゼミでは、フッサール『イデーン』やハイデガー『存在と時間』のゼミで現象学と解釈学の意義を習得。
- ・ この二つの異なる潮流の現代的状況を知るために、ハイデガーの弟子ガダマーの『真理と方法』とアドルノの弟子ハーバーマスの『認識と関心』、双方の論争『解釈学とイデオロギー批判』を一人読みふける。修論はディルタイとフッサールに関するものだったが、今から思うと粗雑な失敗作。しかし、その部分を援用した雑誌『理想』の懸賞論文で佳作に選ばれ自信回復。博士課程 2 年次の 1978 年 2 月終わりに、バイエルン州奨学金でミュンヘン大学(LMU)に留学。当初 1 年間で帰国の予定を変更し、学位取得のため結局 1982 年 3 月まで滞在することになった。

1.3 ミュンヘン大学時代(1978.3~1982.3)

カトリック系の寮で一人暮らしをしながら、陽気なポーランド人の学生と友人となり、郊外の森を散策しながら、ドイツについて非ドイツ的な視点から議じ合う毎日を過ごす。また、日本から来られた先生方を必ずダッハウの強制収容所跡に案内した。毎日、ドイツの新聞を読み、政治の動きに関心を持ち続ける。当時は社民党と自由党の連合政権、野党は保守のキリスト教民主同盟で、ラディカルな緑の党も結成される。

- ・主専攻は哲学、副専攻はプロテスタント神学と日本学。哲学では社会哲学的なゼミで、プロテスタント神学はドイツ観念論的なゼミで、日本学は江戸時代の思想的なゼミで、それぞれ単位を取得。特に、シュライエルマッハーに関するレポートで称賛される（これは後の日本語論文の成果となった）。また、古典語の試験では孟子を選択しその思想になじむ。
- ・博士論文では、解放の神学やフランクフルト学派には批判的で、ハーバーマスと論争中であったローベルト・シュペーマンを指導教授に選び、テーマを当時ドイツ語圏の最先端の学問論争を論考することに決め、親しくなった助手などとも論議を重ねつつ執筆。1981年に東海大学から専任講師のオファーがあったため、1982年3月に提出。時間切れで十分な論考ができなかったため評価はA-だったが、後に加筆して、当時から高名なシュペーマンの推薦により、『批判的合理主義（カール・ポパーが提唱）と超越論的語用論（カール・オットー・アーペルが提唱）』というタイトルの下、28マルクで出版した。「学問をする主体はどうあるべきかという」問題を、自然科学、社会科学、哲学に分節化して論じた内容の独創性には、当時も今も自信を持っている。
- ・なお、ミュンヘン大学の学位規定では、主専攻と副専攻の口頭試問のテーマは博士論文と重ならないことが条件になっており、哲学の口頭試問は政治哲学史とカント・ヘーゲルの二つを選択。1時間以上の長丁場を無事切りぬけたが、その際修得した政治哲学史の知識は、後の『ヨーロッパ社会思想史』（東大出版会,1992）の土台となった。
- ・特記すべきは、1970年代後半から経済哲学へ転向し、当時ミラノに来られた塩野谷祐一教授と新たな学問関係を築いたことで、ロールズへの関心が芽生え、ドイツでのハーバーマスとの比較論文も書いたりした。総じて私の恩師は、塩野谷、アルムブルスター、リーゼンフーバー、シュペーマンの4人であり、この四人はそれぞれが異色であるが、哲学が根源的で統合的学問だという認識では一致している。

過渡期の東海大学教員時代（1982.4~1986.3）と上智大学教員時代(1986.4~1988.3)

帰国してから受けたカルチャー・ショックは多々あるが、特に目についたのは、一部のフランス思想を全西欧の現代思想と称して売り出す思想系ジャーナリズムの異様さであった。浅田彰や中沢新一らのニューアカは単なる「知の連想ゲーム」学派と称するべきで、その島国性や夜郎自大性は喜劇であり悲劇であったと今でも思っている。

東海大学文学部文明学科時代は、現代文明とは何かに思いを巡らしつつ、シュリングとヘーゲルの学問論をまとめたり、恩師シュペーマンのヨーロッパ自然哲学史の訳（『進化論の基盤を問う：目的論の歴史と復権』1987年刊行）を行った。上智大学に招聘されたが、東大教養学部の谷嶋喬四郎教授の画策で城塚登氏の後継として、1987年末に東大に招へいが決定。そこで巻き込まれた出来事は西部・中沢事件として有名になった。

2 東京大学の四半世紀とその後

東京大学への着任を承諾したのは、若き頃からの課題であった「社会諸科学と哲学」の統合がかなう可能性のある教養学部（相関）社会科学科であったから。もし文学部哲学科からのオファーであったら辞退していたであろう。その意味で私は、東大ではなく駒場の教養学部へ赴任したという思いをずっと抱いたまま、四半世紀を過ごした。そこでの知的発展を追ってみたい。

2.1 公共哲学以前の知的発展(1988.4~1999.12)

駒場では、1、2年生向けの社会思想史と3、4年生と大学院生向けの社会哲学をまず担当した。赴任して1年も経たないうちに昭和が終わり、2年目にベルリンの壁が崩壊し、冷戦体制の終焉（それに続くソ連の崩壊）という世界史的出来事が起こった。

- ・この出来事にインパクトを受け、従来の社会思想史とは異なる通史を出す必要に迫られ、講義を基に書き下ろしたのが、『ヨーロッパ社会思想史』（東大出版会、1992）である。従来の近代啓蒙主義やマルクス主義の進歩史観的な視座と異なり、古代ギリシャの政治思想や中世キリスト思想の意義を踏まえて、現代文明の危機までを一辺に書き下ろしたのがこの書であり、「温故知新」という観点から、各章でそれぞれの現代性を書き加えた。
- ・続く『包括的社会哲学』（東大出版会 1983）では、博士論文で培われた論争史という観点を導入しつつ日本であまり紹介されていない諸思潮（ドイツ語圏と英語圏）の意義と限界づけを行い、最後に自然、文化、歴史という「大きな物語」を論じる一つの視座を構築した。この問題関心は、現代に至るまで続いている。
- ・1996年4月の改組で、東京大学大学院総合文化研究科国際社会科学専攻と所属名称が変わり、公共哲学という新しい科目を担当させられることとなった。そのような状況の中で書き下ろされたのが、『新社会哲学宣言』（創文社 1999）である。この書は高度にアカデミックな書であるためか、あまり反響を呼ばなかったが、プレ専門化時代（ヘーゲルまでの時代）、専門化時代（ヘーゲル以降、ヴェーバーの学問論を経て現代に至る時代）、ポスト専門化時代（21世紀に作るべき時代）という学問論史観を導入し、また、生活世界とニュアンスを異にする「公共世界」という概念を導入したという意味で、重要な過渡期の作品と私は位置づけている。
- ・この当時に、特に重要となったのは、デユルケームとマックス・ヴェーバーであり、尊敬すべき同僚の折原浩教授や長尾龍一教授との談話のほか、研究科の違いを超えた、宮本久雄、黒住眞、大貫隆、山本魏教授との教授会後の歓談夕食会はまさに清涼剤であった。

2.2 独自の公共哲学の展開(2000.1~2013.3)

- ・1998年秋に京都フォーラムの金泰晶氏からお誘いを受けてフォーラムに参加し、多くの知己を得た。中でも千葉大学の小林正弥教授と東工大の今田高俊教授との交流は長く続いている。竹中英俊氏ともこの時期に知り合った。また、1999年にはソウル大学、北京社会科学学院、ケンブリッジ大学、ブリュッセルのEU本部などで会議に参加させていただき、2000年3月にはハーバード大学で、チャールズ・テイラーやその弟子マイケル・

サンデルなどと討論したことは、忘れ難い。このフォーラムの成果は、東京大学出版会より『公共哲学』シリーズ全 10 巻（後に全 20 巻）として刊行された。なお、金泰晶氏からは「活私開公」や「グローカル」などのアイデアを頂き感謝しているが、その意味を私なりに深めるにつれて、乖離が生じ、2008 年頃に袂を分かった。

- ・公共哲学は多様であるが、2002 年頃から私独自の内容を提示・展開し始めた。その成果は、『経済の倫理学（丸善 2002）』『公共哲学とは何か』（ちくま新書 2004）『社会福祉思想の革新』（かわさき市民アカデミー出版部 2005）『グローカル公共哲学』（東京大学出版会 2008）『社会とどうかかわるか』（岩波ジュニア新書 2008）『公共哲学からの応答：3.11 の衝撃の後で』（筑摩選書、2011）と続いており、『社会思想史を学ぶ』（ちくま新書 2009）は、1992 年の『ヨーロッパ社会思想史』の公共哲学的要素を強めた形での続編である。

- ・そこで構築した重要概念・テーゼは以下のとおりである。

公共哲学とは何か

「市民的な連帯や共感、批判的な相互の討論にもとづいて公共性の蘇生をめざし、学際的な観点に立って、人々に社会的な活動の参加や貢献を呼びかけようとする実践的哲学（『広辞苑』第 6 版）」

「より善き公正な社会を追究しつつ、現下で起こっている公共的問題(public issues)を市民(the public)と共に論考する実践的哲学」（山脇直司の定義）

諸個人と公共（社会）の関係

- (1) 滅私奉公（めっしほうこう）——私という個人を犠牲にして、お国＝公や組織のために尽くすライフスタイル
 - (2) 滅公奉私（めっこうほうし）——私という個人のために、他者や公正さやルールを無視するライフスタイル
 - (3) 滅私滅公（めっしめっこう）——自暴自棄や無気力なライフスタイル
 - (4) 活私開公（かっしかいこう）——私という個人一人一人を活かしながら、他者とのかわり、公正さの感覚、公共活動、公共の福祉などを開花させるライフスタイル
 - (5) 無私開公（むしかいこう）または 滅私開公（めっしかいこう）——私利私欲をなくして、他者や公共活動や公共の福祉を開花させるライフスタイル。
- 4) 「活私開公」を一般市民の理想的なライフスタイルとし、その実現のために、政治家、組織のリーダー、公務員、医療関係者、宗教家、教育者などによる (5) 「無私開公」「滅私開公」の組み合わせによるシナジー効果（相乗効果）が、日本国憲法 13 条に記されている「諸個人の尊重」と「公共の福祉」の両立を考え、実現するためでも、望ましい。人権は、自己だけではなく「他者の尊重」も含む。

グローカル公共哲学とは何か

- ・グローカルという形容詞は、act locally, think globally という NGO の標語に由来する和製英語として理解する人が多く、イデオロギーの違いを超えて日本では用いられている（地域情報誌『日経グローカル』、新左翼系機関紙『グローカル』（工人社）、早稲田大学、

天理大学 etc)。

- しかし私が用いる「グローバル公共哲学」は、21世紀の現代哲学という方位付けを持つ。local という形容詞を the place of activity という意味を持つラテン語由来の英語 locus の形容詞として理解し、また locality に各自が置かれた「現場性」と「地域性」の双方の意味を付与し (ちなみに Cobuild 英語辞典では、Local means exiting in or belonging to the area where you live, or to the area that you are talking about という説明がなされている)、「各自が置かれた現場や地域に根ざしながら、全地球的な視野で public issues を論考する学問・思想」としてグローバル公共哲学を定義している。
- これによって、論者が一体どのような視座で諸問題を語っているのかが明確にされ、現場や地域の文化、歴史、自然環境のレベルでの多様性が尊重されつつも、globalism にも特殊主義(localism)に陥ることなく、transversal (普遍的、通底的、横断媒介的) な諸価値=善 (平和、公正、人権、福祉、地球環境など) を論考することが可能となる。
- なお、そこで前提となっている人間観を哲学的に表現すれば、応答的・多次元的・生成的「自己—他者—公共世界」理解という形で表すことができる。(詳細は『グローバル公共哲学』第1章を参照されたい。)

公共哲学の担い手

- 多種多様な現場や地域において公共世界に関わる人々 (一般住民、学者・教員、公務員、ジャーナリスト、NGO/NPO 関係者、経営者、会社従業員、科学技術者、医療関係者、宗教関係者 etc.) が、公共哲学のステークホルダー (担い手、利害関係者) と言いうる。一般住民やNGO/NPOのみならず、公務員に関わる公共性とは何か？ジャーナリストに関わる公共性とは何か？教員・学者に関わる公共性とは何か？経営者に関わる公共性とは何か？科学技術者に関わる公共性とは何か？医療関係者に関わる公共性とは何か？宗教関係者に関わる公共性は何か等々、各自がそれぞれステークホルダーの意識を持って現場で問い続けることが必要である。(新しい公共が謳った「居場所と出番」の自覚)。
- そうして初めて公共哲学は、理論的には「開かれたテキスト」として、実践的には「現場でのツール」として、「より良き公正な社会の実現」に貢献しうるであろう。

ポスト専門化時代の学としての公共哲学の三重の観点・方法論

公共哲学は決して理念主義 (観念論) ではなく、次の三つの方法をリンクさせることによって、「理想 VS 現実」という二項対立を乗り越え、「現実 (主義) 的理想主義」ないし「理想 (主義) 的现实主義」の立場を探る。

- 社会調査に基づく現状分析 (ある論) —— 「私たちは何を知らなければならないのか」という問題関心に導かれながら、冷静に社会の様々な現状 (現場) を分析し理解し合う。
- 各自が抱く理想の追求 (べき論) —— 「私たちはどのような理想の社会をめざすべきか」という問題関心に導かれながら、「夢としての善き社会 (ユートピア)」と「悪夢としての悪しき社会 (ディストピア)」について多様なヴィジョンを、様々な現状 (現場) に即しつつ語り合う。
- 様々な条件の下での政策の実現可能性の熟慮 (できる論) —— 「私たちは何を實現できるか」という問題関心に導かれながら、政策可能性を追求し、具体案を提示する。

・もし、以上の方法がバランスを欠くと、単なる現状追認主義（「ある論」のみ）か、机上の夢物語・空論（「べき論」のみ）か、ハウツー論（「できる論」のみ）に陥ってしまう。

WA（和、輪）の思想と Justice（正義）の両立

- ・ユネスコ憲章の序言「戦争は人の心の中で生まれるものであるから人は心の中に平和の砦を築かなければならない」に対応して、WAは何よりもWAR（戦争）との対比で考えられた平和を意味する。
- ・「和して同ぜず=Harmonizing in Diversity and Reconciliation」。「和」は、異なるものを取り入れながらも調和し、ダイナミックに発達していくもの、「同」は、同質的なものの集合体（春秋左氏伝、国語）。
- ・さらにWAは、「和らぎ」や「和やかな」を含蓄し、「連帯の輪」をも指しうるので、「WAの哲学」は平和実現のための「柔和で確固たる連帯」の哲学的理念となり得る。
- ・しかし他方、まあまあ主義に墮したり、個人やマイノリティの抑圧の正当化に加担しないように、WAはSocial Justice（社会的公正）やRestorative Justice（関係修復的正義）の思想によって、補完・強化されなければならない。「活私開公」とWAの補完。

2.3 東大退職後の活動と現在の問題意識

- ・公共哲学をより実践するために、学生の7割が社会人の通信制大学星槎大学を職場に決めた。共生科学部という単科大学で、教育、福祉、環境、国際関係、スポーツ身体分野での共生の在り方を追究。現在副学長、また共生科学会会長に着任。共生科学概説を執筆刊行予定。
- ・統合学術国際研究所の非常勤所長を2013年より務める。ミュンヘン工科大学のクラウス・マインツァー教授やドイツ国立技術アカデミーとともに、独日統合学大会を毎年主催。その成果の一つ『科学・技術と社会倫理』（東京大学出版会）。これはJSTなどにインパクトを与えている。知の統合とは何か、人間存在の統合とは何かの追究。ここを拠点に、教養教育の在り方を見直す作業も企画。
- ・昨年逝去された塩野谷教授の業績を再評価する国際会議への参加を機に、改めて共生のための経済哲学・経済倫理に着手。
- ・『現代公共哲学——リップマンからヌスバウムまで』（ちくま新書）を執筆中断中。
- ・英語の書き下ろし単行本Glocal Public Philosophy刊行を機に、「21世紀の現代哲学」を国際的視野で展開したい。それは、以下のようなものを下敷きに考えている。
 - 1 自然における人間の位置——自然哲学の課題：ポスト・ダーウィニズムの哲学、生命倫理 etc
 - 2 科学・技術の進歩と社会倫理——社会哲学の課題①：近代のプロジェクトと核文明、環境倫理 etc
 - 3 文化と歴史の多様性と普遍的価値——社会哲学の課題②：ポスト・世界人権宣言の哲学、世界平和と公共的記憶の哲学 etc
 - 4 人間と政治のかかわり方——政治哲学の課題：権力論と正義論、公共圏の行方 etc
 - 5 共生のための経済は可能か——経済倫理の課題：福祉、貧困、社会的公正 etc。